

ことに鄭州におけるそれは重大な意味をもっている。龍山文化と接觸し、『大墓の出現、銅器の存在』という不連續面が現れたことは、まさしく殷文明の一側面を照し出したということができよう。青銅文化の殷は、龍山における限り連續的な發展の系列に入るのではなくて、不連續な植民文化の形を示しているのである。そうして『忽然として出現した』その文化の源流はやはりまだ地下深くひそんでいるのである。

さてこうしてこの『古代殷帝國』を通觀してるとき、何としても惜しまれるのは、中國史、否世界史を通じての、この古代文化の位置を解明した章を缺くことである。専門家はいざ知らず、この構成のままでは殷なる壮大な古代帝國が突如として現れ、またそのまま消え去つていったという印象を讀者は受けとりそうである。殷のあとを受けた周、そして春秋戰國、秦漢そして現代中國にまで中原に國家は興亡したのである。そうした歴史の流れのなかでの殷の古代帝國としての位置づけはどんなであるか—この點にスポットをあてた章がぜひとも望まれるところであつた。

さらに殷の文明以前、彩陶、黑陶等の先史文化圏との連關についても、今日ではまだ確たる説がない現況ではあるけれども、もうすこし筆がのばされてもよかつたであらう。また殷文明の二元性は誰しも氣づくところではあるが、その二元性をつくる要素についても、さらに突込んだ敘述が試みられてもよかつたのではないか。特にトウテツ文によつて代表される奇怪な殷の銅器の相貌は、誰しも深く印象に残るところである。それら銅器群、青銅器の實相についてもやや物足りないのである。

以上三七二頁にわたるこの書について、二三のはんの思いつきに

すぎないような意見を附加しながら、書きつづつてきた。しかし評者は強いて異をたてようと試みたのでは毛頭ない。なぜならば、この書は、卜占に用いられた甲骨文の解讀という座標系を中心として描かれた古代殷帝國の像なのである。ひとつの實在を描く座標系は、決して唯一無二ということはできない。青銅器や陶器のような物質文化を座標系として描く方法もあらうし、經濟理論にもとづく座標系もありうるわけである。そして人がどんな座標系をとりあげるかということとは、その人の好みであり主觀的判斷によるものである。しかし同時にそれぞれの座標系は適當な變換によつて、他の座標系に移され得るものであることも必要である。それら各座標系によつて作られる古代殷帝國の像が、もつとその數を増し、そしてそれらをつなぐ適當な變換式を見出すことが、今後の古代史研究の課題なのであらう。そうした意味でも甲骨學を中心としたこの書が、ひとつの概説書としてまず現れたことを喜び、貝塚氏ほかの著者の方々のたいへんな努力に對して、深い敬意を表したいと思う。

(吉田光邦)

齊民要術上

西代山 幸雄 一 訳

昭和三十二年十一月三十日

東京大學出版會

A5版 三五二頁

齊民要術は周知の如く南北朝の後魏の頃、詳しく言えば、西紀五三〇—五五〇年の二〇年の間に、高陽の太守を経た賈思勰によつて

著作された中國古代の総合的な農書であつて、その理論的水準においては、現在の華北旱地農法の原理に近い高さを持つものといわれている。それ故本書は單に東洋史家のみならず、中國の社會經濟史の研究に従う者にとつて、最も貴重な史料の一つで、社會經濟史の流行にともなつて、もつと研究されていよいよ書である。しかし實は若干の人を除いては多少敬して遠ざけられていた感があつた。それは、文章が難解なこと、内容から見て當然農業技術、特に旱地農法に對する深い認識を要求すること、植物學の知識を必要とすること、等である。ところで、これらの要請に答える人は、東洋史學界或いは農業經濟學界にも、そう沢山には求められない。斷片的には貴重な研究は少なしとはいえないが、全面的研究の容易に行なれない原因であつた。

中國においても早くから注目され、特に宋以後は種々の研究があり、何度も校訂、刊行されているが、それは文獻學的、目錄學的な興味の対象とせられ、農業技術の内容が検討され始めたのは、五四運動以後に屬し、特に盛大になつたのは、解放以後であつて、葉篤莊、萬國鼎、王毓瑚諸氏の研究が相次いで發表されたが、特に一九五五年、中央農業宣傳總局の唱導のもとに、南京農學院の萬國鼎教授と西北農學院石聲漢教授が分擔で校釋し、互いに譯文を参照審議して詳細な注釋の附いた『齊民要術今釋』を出版されつつある事は、中國における要術研究上の劃期的な業績である（齊民要術の研究については、石聲漢著『從齊民要術看中國古代的農業科學知識』科學出版社一九五七を参照されたい）。がしかし、この今釋文に先立つて、齊民要術の邦語譯を得たことは、甚だ愉快なことであり、同時に我國の中國學のレベルを誇りうるものであろう。

譯者西山武一、熊代幸雄兩氏は、一九四〇年以來劉春麟氏等交えて齊民要術の譯讀に従事し、西山氏はすでに北京滞在中、齊民要術の校合を「國立北京大學附設農村經濟研究所報告長編2・3號」に發表、さらに『金澤本齊民要術』を影印した人である。いわばこの十八年間齊民要術の研究に専心した人であり、かつ農業經濟畑の出身の人でもあつて、要術の邦譯に最も適した人である。要術は最善の人を得て邦譯されたわけである。

この譯本は上下二冊で、上巻は要術の一卷より六卷まで、西山武一氏の擔當であり、七、八、九巻は熊代幸雄氏の分擔で本年中に公刊される豫定という。しかし兩者の間に充分に意見の調整交換がおこなわれたであろうことは、本書中にも、熊代氏の有益な譯註が多數挿入されていることから充分推察できる。また一九五三年に譯された由であるが、譯了後常に手を加えられたことも、最近の西嶋定生氏「代田法の新解釋」や、石聲漢、萬國鼎氏等の研究成果が隨所にとり入れられている所から明白である。

實は私も一九四八年から三ヶ年にわたつて京都大學人文科學研究所技術史班で、藪内清氏主催のもとに行なわれた『齊民要術研究會』に参加して邦譯の一部をてがけ、その難解さを味つたことがある（京都譯とあるのはその際のもの）ので、多大の興味と期待をもつて本書の刊行を待ち、出版されるや、異常の興奮を感じつつ本書を繙いた。

本書を讀了してまず感じた事は、譯文の正確さは勿論であるが、校訂の綿密なことと編輯の親切、周到なことである。

譯文は、漢文直譯体に偏せず、平易な口語体にうつされている。が、特に我々に役立つのは、例えば轉起（またおこし）、掩青（うめ

くさ、勞(バスケット・ハロウ)、鐵齒編機(ツース・ハロウ)、漫擲(てまき)、鹵地(アルカリ)等々……原文の難解な技術語を、そのままの形で残して、現在の農業用語を以つて振假名を附している點である。これは一見容易なように見えても、一つ一つに考訂を必要とし、而も適當な用語が現在使用されているとは限らず、實は容易なことではなく、特に植物名は中々考證したいものである。この困難を敢えてされた點に先ず敬意を表せざるを得ない。第二はその行届いた注釋である。語句そのものの注釋はしばらくおくも、特に我々に役立つのは、各處に散在する農業技術の解説であり、それは、或は要術の原理と現在の技術との對比(例八二頁註一九、一五頁註一二)或は要術前後の發展の經過(例三〇頁註二四)また單に中國のみならず他國旱地農法との比較(例六一頁註二三、八二頁註一一)、或いは旱地農法と水田農法との比較、また本文が著しく複雑な場合には註で要約している(一九四頁註一)等、讀者に要術の内容を理解させるためには、その勞力を計算せずに、親切丁寧をきわめている。これ等の註は後に附された解説とともに我々に旱地農法の基礎概念を與え、中國の經濟、或いは土地問題を考える場合、直接間接に多大の教示を與えるものであらう。

次いで校勘について述べておきたい。本譯書は凡例にも示されている如く、商務印書館刊行の萬有文庫本を底本とし、高山寺本、金澤文庫本、四部叢刊本、學津討源本、津逮祕書本その他の刊本の他に、要術以外の諸書によつて對校したものであり、校訂の詳細は各篇末に校註を附して説明している。本書は北宋本の復原を期したにかかわらず、金澤本を底本とせずに、現在最も流布している萬有文庫本を底本として、一に利用者の便宜を顧慮された點を感謝したい。

その他譯者が原本の段節を變えた所は*を印し、また萬有文庫本をあらためた場合にも、念のために萬有文庫本の文を載せ、原註は【】で、後人の追註は『』でつつみ、自分の附加した語は()を附す等細心の用意がなされている。

第三の編輯の親切、周到さは、解説、齊民要術刊本系統表、農曆天象一覽表、中國在來農具圖、關係文獻目錄などによくあらわれている。解説は全編三九頁、一 要術の輪郭、二 要術と中國農書史、三 要術の農田と作物、四 要術の耐旱耕種技術、五 要術の農具、六 要術の度量衡、七 要術の傳承と研究、の七節よりなつてゐる。その中特に重要なものは三と四である。三では要術には禾第三から麻子第九までは高田作物であり、大小麥第十、十一と十二の水稻と旱稻は下田の作物であると喝破された事は今後の要術分析上きわめて重要な鍵を與えるものであらう。但し禾は、禾自体の栽培法を述べつつ、一面主穀栽培法汎論とも言ふべき性格をも併有している。その他主穀類と同列にしがたく、嚴密に言えば黍稷より麻子までを高田作物と稱すべきでなかろうか。第四の要術の耐旱耕種技術こそは、要術、いな旱地農法一般の最も重要課題であるが、この作業を、耕、勞、播、種、條播耨地、鋤地等に分析して解説し、併せて呂氏春秋、汜勝之書のそれと比較している。いわば要術理解の基礎をなすもので、本文を読む前に是非一讀しておくべき文である。ただ、呂氏春秋、汜勝之、要術は、同じ華北旱地農法というも、同一の場所ではないから、慾を言えば山東、中原、關中の自然條件の相違を今少し詳しく説明してはしい氣がする。他の三つは各一・二頁のものであるが、要術の本書の譯讀に甚だ便宜かつ有益のものがある。刊本系統表は本書では表のみあげられているが、金澤文庫の

影印本の附録に詳しい解説のあることを附記しておきたい。農曆天象一覽表には、望蜀の言を弄するならば、二十四氣節は太陽曆の何月何日にあたるかを記入していただてれば甚だ便利であつたろう。今一つの文献目録には、この外萬國鼎「汜勝之書輯釋」、陶希聖「齊民要術裏田園的商品生産」（食貨三の四）を附記しておきたい。以上長々と本書の特色を述べたが一言にして言えば、端から端まで、譯者の親切が行きわたつていゝという事であらう。

以下、通讀中に氣づいた一私の誤りもあるかも知れぬが一、三の點を述べておきたい。

「小豆は概して麥跡に作るが、それではやや晚すぎる嫌があるから、土地に餘裕のある農家は、でき得る限り、昨年の穀跡（あわあと）を小豆のために空けておくがよい（八三頁小豆第七）」との譯である。氏の據つてゐる金澤本では「小豆率用麥底。然恐小晚。有地者。常須兼留去歲穀下以擬之」とある。したがつて穀跡と何かと二つを留めてゐる事になるが「何か」は麥跡より外にない。でここは「土地に餘裕のある農家は、でき得る限り、昨年の穀跡を、麥跡と併せて小豆のために空けておくがよい」と云う意味である。この一文は、要術に二年三作があるか否か、また一部あるとすればどの程度かを推察する上の一つの鍵を提供する文である。氏もこの事に留意して、八四頁の註一、解説三二二頁、同三二二頁等に引用してゐるが、小豆を麥底にまくのは少地の農家の餘儀ない法とされてゐる。しかしこのように讀めば、「有地の農家が穀跡をも使用するのは、萬一の場合を考えての安全措置であつて、小豆を麥底にまくのは例外的でなく、有地、少地にかかわらない普遍的な方法」と解されはしないだらうか。またこのように解してこそ、率という語も生きてく

るのではないだらうか。

次いで水稻の栽培法であるが、氏は「稻無所緣唯歲易爲良。選地欲近上流。地無良薄。水清則稻美（下二句は割註）」の一文を「稻は（地味などに）特別の所緣（このみ）はなく、ただ歲易することが肝心である。稻田を選ぶに上流に近いがよい。地味の良薄は關係がない。水さえ清ければ上等の稻ができる（一〇一頁）」と譯してゐる。一見すれば「無所緣」は土地條件のないことを云つてゐるようであるが、直後に「上流に近きがよい」と土地のこのみをつけてゐるし、氏のように所緣の内容を地味と限定したならば（限定する必然性がわからないが）、「地無良薄」と全く重複する。話の順を見ても土地條件、輪栽順序、土地條件となり、すわりがわるい。で私は「稻無所緣」は輪作順序すなわち底について述べた語と解し、「稻はどんな植物のあとに栽培してもよいが、ただ連作だけはさけた方がよい」と讀みたい。また「歲易爲良」の良も、良の本來の意味、他の個所の使用例からみて、ベター程度で、必須條件という程のものでない。なお周官の文（一〇二頁）、禮記月令の文（同頁）も連作にも讀めるから、當時漢代の水稻栽培法を必ずしも歲易とは斷じがたいと思う（この項については拙稿、應劭「火耕水耨」注より見たる後漢江淮の水稻作技術について、史林三八卷五號に詳説したことがある）。巻頭雜説の「毎年一易。必莫頻種。其雜田地即是來年穀資」を「隔年に休ませるがよく、必ず（禾穀）を頻種（れんさく）してはならない。今年雜作に充てた田地は來年の穀作の資になる（二〇頁）」と譯されてゐるが、隔年に休ませるを休閒に解すれば「其雜田地即是來年穀資」と矛盾する。氏もそれに氣付き「間の年には地力恢復的雜作物を作つたであらう（一四頁註六）」と補足してゐる。この讀法

は易の目的語を田と解した結果、隔年休ませると譯されたものである。が、「毎年一易」と次の「必莫頻種」とは連續したものであるから、一易の目的語と頻種の目的語とは、同一性質のもの、したがって一易の目的語は田でなくて田に種る作物と考えた方が自然であるまいか。でこの所は、「作物は毎年一回易えて必ず頻種してはならない……」と譯したのである。そうすれば註を附する必要もないであろう。雜作の年も田を休めている年と廣義に解釋できぬこともないが、讀者に混亂を與えるおそれがある。なお頻種を「れんさく」とルビされているが、連作とは單に連續して植えると言うよりも通常同一作物を續けて栽培する意味に使用されるものであるから、これまた誤解を生ずるおそれがある。頻種だけでは同一作物を連續するという意味は生れないであろう。

以下は地名に關することであるが、氏は高陽郡については「賈氏の高陽郡は晋の南遷に伴つて山東省内に僑置された郡で、いまの青州府益都縣一帯である(三〇九頁)」とされているが、當時の高陽は、今の臨淄縣一帯ではなからうか。また晋の南遷にともなつて云々は、不明確な語で、晋の南遷による僑郡ならば、東晋の領土内に僑置されねばならない筈。耕田篇「今遼東耕墾曠長四赤」の遼東郡について『京都譯は、「尙頼其利」で崔寔の文を打切り、「今遼以下」は賈氏の文としているが、六朝時遼東は高句麗の範圍であるから、遼東に關しての此のような知識乃至記述よりは、六朝—後魏人のものでなく、漢人のものと考ええる。従つて遼東の耕墾の件も、崔寔の文の續きであると解する(三六頁註七〇)』と述べているが、後魏の時には、遼東郡を今の河北省徐水縣の地に僑置している。したがつてこの話は所謂遼東の話ではなく、華北平原の犁の話をしたものと

も考えうる。また高句麗の領土内の遼東の話であつても、その地の事を賈思勰が知らないと言ふのも速断であり、この文は賈氏自身の筆でないとは断定できない。今一つ水稻の項において四民月令の五月の條「別稻及藍、至後二十日莠麥田」をひいて「……ともかく後漢の崔寔、彼の活動舞台であつた關中乃至五原の地で、既に水稻移植法は確立された(一〇八頁)」と述べていられる。崔寔は五原の太守として活躍した人であるが、彼の家は元來河北涿郡安平(今の保定)の名家で、四民月令はこの地方、廣く言つても河北の農業事情を述べたものである。月令中の宿麥を種える時期が、氾勝之書に比較して相當おそいことからでも、關中でなく、ましてや五原でない事があきらかである(五原ならば麥は春播であらう)。なお後漢の頃に水稻移植法が五原の地に確立されていたと考えるのも無理ではなからうか。

最後に二年三作の有無に附言しておきたい。氏は禾豆は高田に、芒種は下田に種えられている關係上二年三作はあり得ないといわれるが(三二二頁)、禾は「山田には強苗種えを選んで風霜の害を避くべく、濕田には弱苗種を選んで豐熟をねらう(四四頁)」とある如く、必ずしも高田、下田を問わない。したがつて水利のよい下田(下濕田ではない)の二年三作は可能である。また氏が例外としている小豆—麥の年二作も、必ずしも少地農家の苦肉の策でない事は前述の通り。その外、有名な鄭司農の周禮稻人註の「禾下麥、夷下麥」もここでは例外的と考えているが、この文を「華北二年三作型輪作体系の原基としての禾—麥、麥—豆なる年二毛作技術は、漢代既に日常化していたのである(一〇六頁註一八)」と解すとそぐわない感じがする。氏はこの年二毛作技術を目して、二年三作の原基と言われ

るが、私は逆に、二年三作は、年二作の不完全形で、その意味で、二毛作の原形と考える。私は最近要術を検討した結果「二年三作こそ要術の推賞するシステムでなかつたか」という疑を持つ様になつた。がしかし、この問題は中國農業史上の大きな問題であるので、一層自説を検討して稿をあらためて發表したいと思つてゐる。

以上私は失禮を顧みず先學の力作に對して妄言を敢てしたが、繰返すようであるが、譯者長年の勞苦によつて難解な齊民要術は農業知識の少ない私達にもよく理解できるようにした。本書は中國古代史及び社會經濟史家の必携の書と言ふも過言ではない。氏は「要術研究の如き廣汎未開の分野の開拓は、ひろく世間同學の協力に依らねばできないのであり、本書の如きは僅かにその一里塚にすぎない」と謙遜していられるが、それは譯者の學問的良心から出た言葉であつて、要術研究はここに一つの金字塔を樹立されたものと言ふべきであらう。

〔附記〕

文中であれたが、最近中國から、石聲漢氏の「齊民要術近釋」(全四冊、うち二冊一卷より六巻まで既刊)が公刊された。本書の解釋も、不審に感ずる所もあるが、現地人の有利さを發揮した優れた箇所も多い。例えば晴田與晴田皆傷田、二歲不起稼、則一歲休之を「二年つづけて作物の出來がわるいと一年休閑せよ(一八頁)」とするなどは、是非は別として、新しい注意すべき解釋であらう。兩書を併讀することを、おすすめしたい。

(米田賢次郎)

Rise and Fall of the Mughal Empire

by R. P. Tripathi. Allahabad (Central Book Depot), 1956. A5 IX + 504 pp. index, 4 maps.

インディヤ歴史家によつて最近執筆されたムガル帝國史概説書の一つを紹介する。著者 R. P. Tripathi 氏はブランバール (Allahabad) 大學史學科前主任、現サウガル (Saugar) 大學副總長の地位にある人。Some Aspects of Muslim Administration, 1956. の著などを通じてインド・イスラーム時代の研究家として知られてゐる。

ムガル帝國史の概説書としては、既に英國人史家によつて編まれた有名な The Cambridge History of India, vol. IV, The Mughal Period. Cambridge, 1937. の大冊がある外、The Cambridge History of India, ed. by H. H. Dodwell. Cambridge 1934. やまた獨立後のインド人の書いたものと The An Advanced History of India, by R. C. Majumdar, H. C. Raychaudhuri & Kalkinkar Datta, 2nd ed. London, 1950. Part II Book II (p. 425ff.) にそれぞれムガル時代史が含まれてゐる。また近く The History and Culture of the Indian People, ed. by R. C. Majumdar & A. D. Pusalker. vol. VII, The Mughal Empire. (現在第 7 卷に vol. IV まづ出ている。) の出版が豫定されてゐると聞く。本書はこれらのムガル朝史概説書の中でどのような特色を示そうとするのか。著者によれば、「本書のねらいは今一つ別の教本を世に送出すものではなく、大ムガル帝國史をそれに興味を抱くあらゆる人々のために最新の研究、調査に照して再説することにある」(Preface p. 1) と。即ち「最新の研究を採入れたことをその特色」と言う。著者は又、「歴史記述の精髓は正確さにある」と言う實證主義的主張から原史料を丹念に精査して可能な限り忠實を